

## アジアをフルートで結ぶ。 第4回アジア・フルートコングレスを開催。

2011年12月2日～5日に、武蔵野音楽大学江古田キャンパスで、第4回アジア・フルートコングレスが開催された。フルートという楽器を通じてアジア各国と交流を図り、結びつけようというアジア・フルート連盟の最大のイベントである。東日本大震災や資金難を乗り越えて3年ぶりの日本大会は成功を収めた。

フルート人口は多いが、アジアでの交流は乏しい。

アジア・フルート連盟が主催するアジア・フルートコングレスは、2008年にAJOSCの助成を受けて始まった。以降、韓国と中国で2回目、3回目が開催され、2011年度は再び日本に戻ってきた。

第4回目のアジア・フルートコングレスは、共催した武蔵野音楽大学の江古田キャンパスを会場として12月2日～5日に行われた。交流コンサート、フルートコンクール、レクチャー、公開レッスンと内容も豊富である。

当初は演奏会と会議による交流であったが、2回目からはコンクールも行われるようになった。また、現在は台湾も連盟に加わっている。

ただし、今回は開催が危ぶまれた。同コングレスの実行委員長であり、アジア・フルート連盟 会長の金昌国さんは次のように語る。

「東日本大震災とその後の原発事故のために、日本が危ない地域だという印象を持つ国もありました。しかし、フルート、そして音楽を愛する方々の気持ちがそれに打ち勝って、多くの参加者を得ることができてほっとしています」

一般的には知られていないが、フルート人口はたいへん多く、ピアノに次ぐと言われる。また、経済状況と奏者の数は比例関係にあり、以前の日本は韓国や中国を圧倒していたが、両国の経済発展に伴って、韓国や中国でもフルート奏者が飛躍的に増えているという。



コンサートの様子



中国と尚美学園大学のフルートオーケストラ

そういうなかでもアジア各国の交流はほとんどない状態だった。

「それぞれの国がヨーロッパ諸国との交流だけだったので。それだけにアジア・フルート連盟の発足と、このコングレスの意義は大きいと考えています」と金昌国さんはいう。

今聴いているモーツァルトは、間違いが含まれている。

コンサートはなかなかユニークだ。例えば中国フルートオーケストラと尚美学園大学のフルートオーケストラの共演。オーケストラの各パートをフルートだけで再現するものである。一般的なフルートだけではなく、ピッコロ、アルトフルート、バスフルート、コントラバスフルートなど音域の異なる珍しいフルートも登場する。演奏者も、同連盟で中心的に活動しているNHK交響楽団の首席奏者である神田寛明さんを初め、各国の一流奏者が集う。

一方のレクチャーの例では「循環呼吸奏法について」というフルートを吹きながら鼻で息を吸い込む演奏法の講義があった。アジア人は肺活量が比較的に少ないため、これができるロングトーンが可能になる。また、金昌国



各国の代表者が集まったアジア・フルート連盟の総会



公開レッスンの様子

担当者より



**主催国としてのつとめを果たすことができました。**

アジア・フルート連盟会長  
**金昌国さん**

AJOSCの助成でスタートできた大会です。今回もスタッフは手弁当で参加するくらい予算は切り詰め、各国の出場者は自費で渡航してもらいました。主催国としての最低限の対応にもコストがかかります。今回の助成によって、大盛況で大会を運営することができました。心より感謝申し上げます。

さんの「モーツァルト・音の間違い、装飾音、トリル、アーティキュレーションについて」という講義も面白い。簡単にコピーができる現代とは違い、昔は譜面を手で写していたため、間違いや意図的な加筆が行われているケースがあるという。私たちが聴いているモーツァルトは、オリジナルとは少し違うようだ。

そして、コンクール。4カ国からそれぞれの1～3次予選（参加60名）を勝ち進んだ7名が12月5日の本選会に出場した。ここまでくると、上位者は甲乙つけがたい技術を持っている。見事優勝したのは、日本の石田彩子さん。2位と3位も日本人だった。各国の追い上げはあるものの、現時点では歴史のある日本が優位という状況にある。

「ただ音楽に限りませんが国家的に芸術に力を入れている中国や企業バックアップの盛んな韓国と比較すると、日本は個人が頑張っている形です。いつまでも優位ではいられないでしょう」と神田さんは語る。

今回の開催でも最大の問題は資金だった。今後アジア・フルート連盟にはシンガポールなど他のアジア諸国も加わってくると予想される。各国との交流を深めながら、国内の関心度の向上や独自の資金調達の見込みを作っていくことが、全体の活性化には欠かせない条件になると同連盟では考えている。